

第1章 マロン村の仲よし3人組

みなしごエイミー

エイミーがほっぺをパンパンはたいてかけてきました。エイミーはみなしごだったのですが、もう13年も前のことです。おばあさんの屋台の前に毛布に包まれた赤ちゃんが置かれていたのです。おばあさんは身よりもなく年を取っていましたが、誰も引き取り手がなかったので、おばあさんが育てることにしました。今は行商のおばあさんと一緒に仲良く暮らしています。



おばあさんの名前はアン・フォーリーブスです。その赤ちゃんはエイミーと名づけられました。フォーリーブスは、四つ葉のクローバーです。大きくなったエイミーは、おばあさんと野菜を作って、朝の行商についていきます。なかなかクローバーは見つかりません。エイミーはいつか母親に会えると思いクローバーを見つけては、大事に色紙にはっています。そして友だちにこういいます。

「あたいの名前は、幸せのクローバーだよ。だからとっても幸せだよ。でも、あたいの髪飾りはスリーリーブスよ。おばあさんに会ったときにクローバーにするんだ」

そういつていつも三つ葉のアクセサリを、頭につけるようになりました。今日もエイミーは、おばあさんと朝早く起きて、家のまわりの小さな畑にいます。市場には朝の6時半に着かなくてはいけ

ません。お陽さまがちょうど出かかってくる初夏の、5時前後がエイミーの起床時間です。

家の東にある裏山の向こう側に、マロン村の街並みがあります。山があるので、家から見ることはできません。少しずつその山の端から、朝日が差し込んできます。エイミーの部屋は西側にあります。そこからは大きな海が広がっていて、エイミーはこの風景が大好きです。家は少し小高い丘の上であり、海面からほんの60メートルくらいの高さです。歩いて浜辺に行く道がたくさんあります。300メートルほどで海に出られます。

「今日は、バジルとトマトとマリーゴールドを収穫しようかいのう」

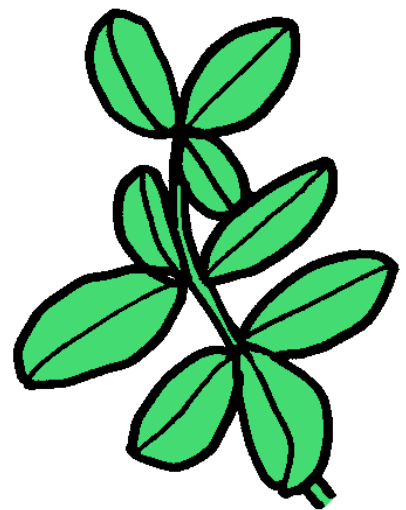
アンおばあさんがいいました。エイミーがお手伝いをします。

「うん、エイミーがトマトを取ってくるよ。バアは危ないからね」

そうやって50センチくらいの踏み台を持って、2メートルくらいの高さから、下に向かって実のっている、いろいろなトマトを収穫していきました。

「エイミー、気をつけるんだよ。調子に乗るんじゃないよ」

いつまでたってもアンおばあさんはエイミーのことが心配です。バジルはソースにした方が高く売れるので、家に持って帰り調理します。オレンジ色のマリーゴールドと、いろいろな色のトマトを市場で販売します。トマトは赤い1センチくらいの本当に小さいもの



から、すこし楕円形をした黄、橙、赤色だけでなく白や黒いミニトマトがあります。もちろん大きなまっかなトマトも大の自慢です。

「バア、屋台、持ってきたよ」

「おお、いつも気がきくね」

これは市場が休みの月曜日以外の毎朝の出来事です。この村の名前はマロン村といいます。昔は栗の栽培が盛んなところでしたが、大きな洪水で栗林がやられてしまいました。何年もかかって育てた栗の木が、根こそぎ洪水によって土砂のなかに埋もれてしまいました。



村人は収穫まで何年も待てないので、いろいろと考えました。そこで気候も適していて、1年に3回収穫できるトマトの栽培が、この村の産業になって行きました。市場には遠くからおいしいトマトを求めて、いろいろな人たちがやってきます。アンおばあさんとエイミーも、荷馬車をひいて20分ほどの市場に到着しました。

「エイミー、ありがとよ。はやく学校へおいき」

そういつて、アンおばあさんはお弁当を渡すと、はやくはやくといわんばかりに手を振って、十字をきりお祈りをしました。

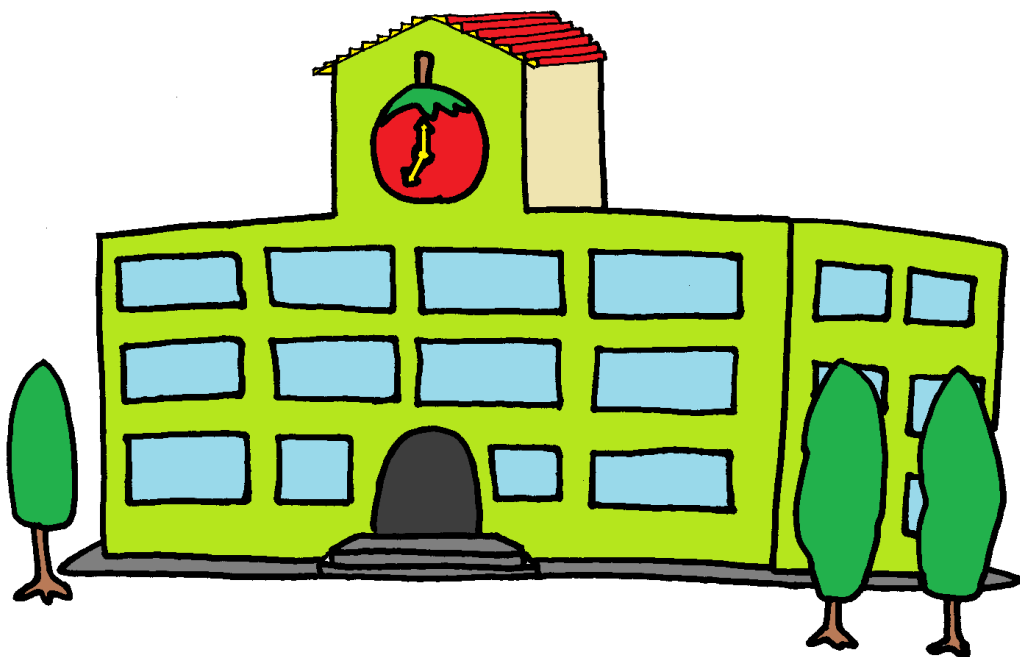
【神様、エイミーを今日もよろしくお願いします】

なかよし3人組

「エイミー、オハヨ〜〜〜」

「エイミー、グッモ・・・」

市場の噴水の前が、学校への集合場所です。みんなが集まってきて、口々にあいさつをしています。人気者のエイミーは、マロン村立小学校の6年生で最上級生です。1年生、2年生、3年生を見守りながら、4年生、5年生を指導し集団登校で、みんなを安全に学校へ連れていく係です。



「エイミー、お歌を歌って」

一緒に登校する小さな子供たちが、歌を歌うようにお願いします。

「ワクワクレシピの歌かあ！」

そういつて、この歌を歌い始めました。毎日のことなので、小さい子も5、6年生の子も、みんな知っています。元気よくワクワクしてレシピの歌の合唱が始まりました。これが、学校へ通うときの歌とあいさつのようなのです。いつもこのようにして、エイミーの学校の1日が始まるのです。

『ワクワクレシピ』

1. おなかがすいたと思ったら ワクワクレシピに誘われて
入ったところが運のつき ここが地獄の一丁目
二度と出られに石切り場



2. 朝のサラダはニンジンと セロリのスティックだいきらい
お昼に出てくる給食の 丸ごとトマトもだいきらい
カボチャのスープもだいきらい



3. じゅんちゃんコチュジャン豆板醤 たまには辛いのが食べたいよ
ぎょうざ しゅうまい 肉だんご 中華料理もおいしいね
肉まん 豚まん 中華まん
4. ところでじゅんちゃん誰の事 エイミー トミーもわからない
もちろんボクたちワタシたち 何にも知らずに歌うんだ
ワクワクレシピのこの歌を・・・

「あ～～おもしろかったね」

毎日のあいさつはこの歌から始まるようです。第1時限目はエイミーの大好きな国語です。今日は[わたしの夢]という題で原稿用紙1枚、400字の作文をします。

【わーい、今日は大好きな作文だ】

エイミーは、うれしそうに心の中で叫びました。

「冗談、やめてほしいな・・・」

右隣の席では、エイミーの一番の親友、バーバラ・オリオンがため息をついていました。

「あ～あ、なに書きやいんだよお・・・」

なにかと、エイミーにちょっかいを出す、やんちゃな男子生徒のトミー・ラディッシュも、同じように、ため息をつきました。

「だいじょうぶ、だいじょうぶ」

エイミーは隣のバーバラとトミーに、余裕で声をかけます。

「さあ、時間は40分です。書きあげた人から、外にでていってもいいですよ」

先生がいました。

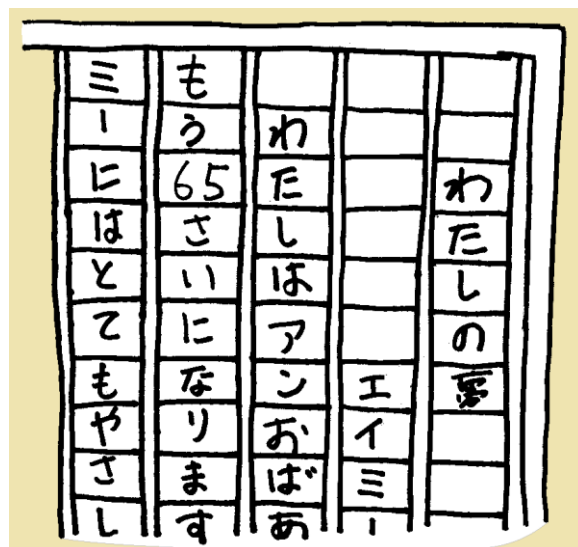
【やった～～】

エイミーは、ますますうれしそうです。

「ったく～～、ほんとに、冗談やめてよ～～」

「時間が足りないかも・・・」

生徒は少し不満があるようです。エイミーはゆっくりと、しかし力強く書き始めました。



【わたしの夢 エイミー・フォーリーブス】

わたしはアンおばあさんと二人で一緒に暮らしています。おばあさんはもう 65 歳になります。とても元気で毎日畑の仕事をしています。おばあさんはエイミーにはとてもやさしい人です。

畑ではいろいろなトマトを育てています。小さいものから大きなものまで、黄色、赤色、白色、黒色のトマトもあります。おばあさんの育てたトマトはとてもおいしくて人気があります。わたしはおばあさんと毎朝畑でトマトをとってから、一緒に市場に行くことが楽しいです。でも小さいころはトマトは少し苦手でした。そんな私をみておばあさんはフルーツトマトを育てるようになりました。今ではフルーツトマトはよく売れるので、お金が貯まるっておばあさんは喜んでいきます。

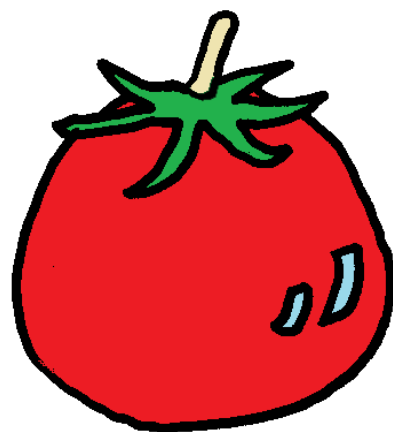
わたしはよくトマトの国の夢を見ます。その国はトナトンと呼ばれ、かわいい野菜のお友だちやお母さんがいて、おいしいトマトを食べさせてくれます。わたしは三つ葉のリボンをつけています。でもなぜか、夢の中でおかあさんに会うときは四つ葉のクローバーになっています。

いつかやさしいおばあさんと、おかあさんもいっしょに食事がしたいと思います。そのときはきっと四つ葉のクローバーをつけています。トマトももっと大好きになっているといいな、と思います。もちろん野菜のお友だちもいっしょです。

エイミーは、20分もかからずに作文を書きあげ先生に渡すと、一人先に教室を出て行きました。

「すげえな、エイミーは、やっぱ」

そうトミーがいますが、なぜかさみしそうなエイミーには、誰も気がつきませんでした。



ふしぎな雑木林の話

「待ったわよ・・・」

今日の授業が全部終わり、エイミーとバーバラが、放課後の校庭の正門近くにある、みかん畑でトミーに声をかけました。

「いやあーまいった、まいった」

トミーは頭をかきながら、エイミーとバーバラに照れながらいいました。

「ったくあんたは、本当に作文が苦手ね」

バーバラが右手でこぶしを頭の上にあげ、苦虫のような顔でからかうようにいいました。

「本当に作文は苦手だよ。だって授業中に何も浮かんでこないだ。放課後においらの好きなスキーの話を書いたよ」

「なんて書いたの？」

エイミーが笑顔で聞きました。

「スキーの選手になりたい。試合で優勝したい。スキー場で働きたい。なんていっぱい書いたよ」

「そんなの、授業中に書けばいいじゃないの？」

バーバラが、あきれたような顔でいました。

「そりゃあそうなんだけど、でてこないんだよね。夕日が山に沈んでいくのを見たら、書くことができたんだ」

「まあ、いいんじゃない。はやく帰りましょ」

エイミー、バーバラ、トミーは3人で一緒に帰ることが習慣になっています。

「・・・で、その後どうだった？」

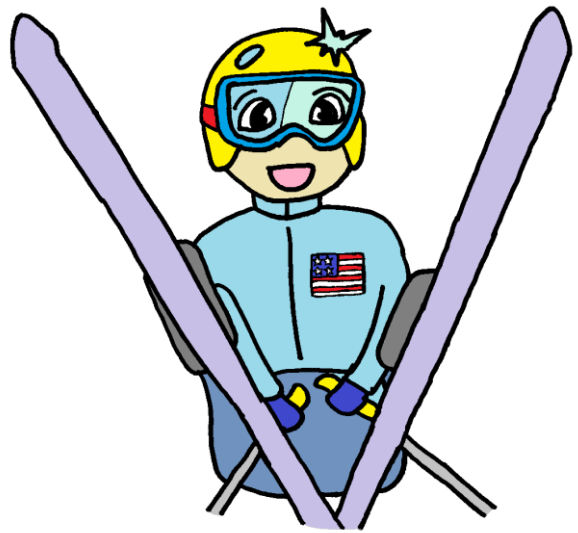
トミーがエイミーにたずねました。

「不思議な林のこと？」

「そう、それぞれ」

「わかったことはお月さまがまあるく明るくなってくると、林の光も明るくなるのよ」

エイミーはただでさえ大きな眼をもっと見開いて話を続けました。



「一番明るくなった時は、1つの家ぐらいの大きさで、ポーっと青色や緑色の光を出しているのよ」

エイミーは得意そうに話しています。家が近いから良く知っているのです。

「でもエイミー、それってとっても危ない光だって、おとうさんがいったわよ」

「そうそう、おいらのおっかーもいった。絶対にお月さんの明るい時は、近づいちゃだめだって」



トミーもうなずいていいいます。

「それにあそこには、柵があって入っちゃだめって書いてあるわ」

「大人たちは絶対に行っちゃだめっていったるぜ」

バーバラもトミーも少しこわごわとしたようすです。

「そりゃあそうなんだけど〜〜、でも遠くで見たその光は何かこっちへおいでっていつているみたい」

エイミーは少し物悲しそうにいいました。

「エイミーは想像力が豊なんだよ。いろいろなことを考えるんだよ」

「エイミー、絶対に近づいちゃだめよ。光に吸い込まれちゃうわよ」

トミーもバーバラもエイミーの顔を見ながら忠告しました。

「そりゃ近づかないわよ。だって、あたいだってこわいもん」

エイミーも肩を少しすぼめて、二人の顔を見ながら首を横に振りました。こうして3人は一緒に街をへだてて学校と反対側にある、それぞれの家に向かって歩いていきました。しばらく誰も何も話ませんでした。

「トミーがそんなこというからだよ」

突然、バーバラが口を開きました。

「なんなんだよ、いったい？」

「だって、トミーがそんな光る林のこと
いうから、みんなだまっちゃったじゃないよ」



「なんだ、そんなこと？おいらはスキー
の選手になって優勝することを今、考えていたんだ」

「あんたって幸せね」

バーバラは、少しあきれてしまいました。

「バーバラはまだ林のこと考えてたの？」

エイミーがいました。

「・・・うん・・・そう。だってトミーがあんな話をするから・・・」

バーバラは雑木林の話が大きらいです。人一倍こわがり屋さんなのです。

「ごめんごめん、バーバラ。でも明日が満月の日だから、なぜか思
いだしちゃって・・・」

「トミーも私の前ではこの話はしないでね」

「でも、この間、光るものを取りに行くって、時計屋さんがそこ
行って、戻ってこなかったって。時計が壊れたから修理に困ったっ
て、おっとーがいったんだ」

「その話知ってるわよ」

エイミーもトミーに続いて話をしました。

「時計屋のおじさんが満月の夜酔っぱらって柵を越えて雑木林の方
へ入って行ってしまったって話・・・」

「そうそう、エイミー、バーバラ、それでね、光が渦を巻いておじ
さんを飲みこんでしまうんだよ。おじさんは助けて一っついていても
周りに誰もいないし・・・」



「トミー、もう、やめてよ。そんなこわいはなし。でも誰もいないのにどうしてそんな見た風に言うことができるの？」

「そ、それはそうだね。トミーの想像力かしら？ね、バーバラ、でも明日がその満月の日ね」

エイミーが少しキリっとした顔でいいました。

「まさか、そこへ行くってんじゃないよね」

バーバラがあわてて手を横に振っていいました。

「い、行かないわよ。そういっただけ」

「ならいいんだけど。もうこの話はやめましょ」

バーバラが、手を横に振って別の話題を話し始めました。

【・・・光る雑木林か・・・】

エイミーの頭から、はなれません。

【何があるのかしら・・・？】

エイミーは好奇心でいっぱいになってきました。

「エイミー、エイミー・・・」

「・・・ん？バーバラ、どうしたの？」



「どうしたのって、あんたわたしの話を聞いてないの？先生が算数の時に言った、宿題の話・・・？」

「・・・そうそう、おもしろかったわね。」

「？おもしろい？宿題が？」

「・・・えっ？宿題？」

「あんたまさか、満月のことで頭がいっぱいじゃないの？やめてよ、そんなはなし」



「違う、違う」

「行くんなら、おいらも手伝ってもいいよ」

トミーは、エイミーにいいました。

「もう、トミーもエイミーも勝手にしたらいいわ。わたしはここでお別れだから、これで帰るわ」

バーバラは先に分かれて自分の家に帰って行きました。

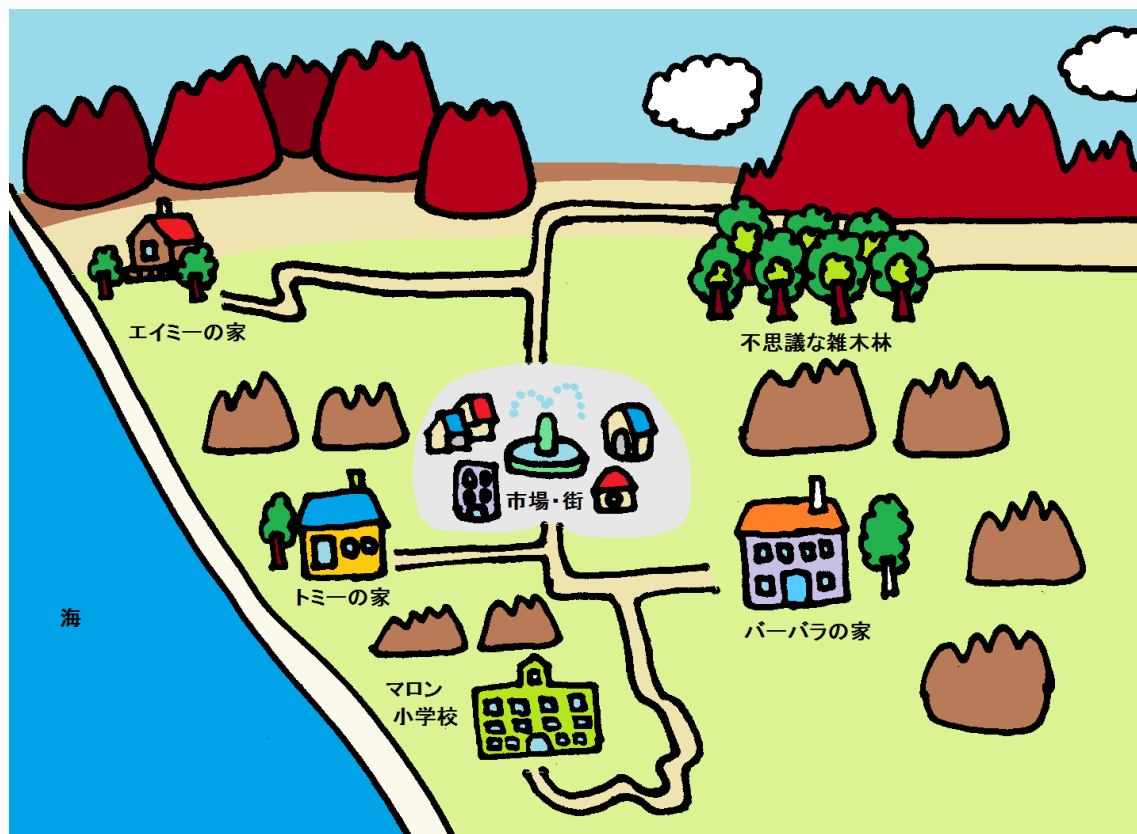
「トミー、違うのよ。ちょっとだけ興味があっただけなの」

「まあいいよ。行くんなら男手がいるだろ？いってくれば、ついていってあげるよ。おっとーにいったらごはん抜きだけどね」

トミーが笑いながら手を振って、彼も自分の家に帰って行きました。

【たしかにね～？興味はあっても、ひとりでいっちゃいけないわね】

エイミーは自分にそっくりいさせながら、最後のひとりになって家を目ざしました。市場を過ぎて街の外れですがもうすぐ家です。まだ夏の前なのでお陽様も高く、街は夕暮れ前のすごしやすい時間です。



昔からのいい伝え

エイミーはいつものようにアンおばあさんと夕食のしたくをして、食卓につきました。大きな声でおばあさんの顔をみながら、

「いただきまーす」

エイミーは、食べるときは特に元気いっぱいです。

「お月さんが大きくてきれいね」

エイミーには窓越しに東の空から昇って来る、お月さんが大きく光っているのが見えます。

「ほんとうだねえ。明日は満月だから、今日もお月さんが大きいねえ」

アンおばあさんも答えます。でもなぜかいつも元気なエイミーが、始めのいただきますの後は、やけに静かです。

「おや、エイミー、どうしたのかい？今日はおとなしいねえ？なにか学校であったのかい？」

アンおばあさんが心配そうにたずねました。

「ううん。今日は国語で作文を書いたんだ。
‘わたしの夢’ってタイトルだよ」

「おや、まあ、それはよかったねえ。そのことを考えていたのかい？」



アンおばあさんは少しほっとした表情になっていました。

「それで、なにを書いたんだい？」

「夢のなかのトマトの国で、野菜のお友だちとおかあさんと会う夢だよ」

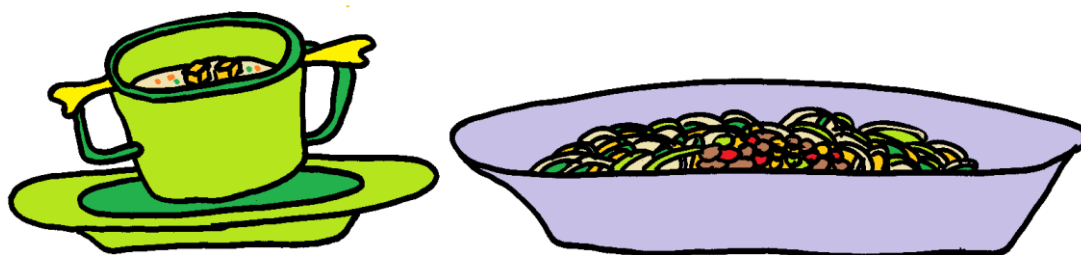
エイミーは楽しそうに答えました。

「おや、まあ、またその夢かい？あたしゃ、まだ小さなあんたに、全部を話しちまったけど、よかったかのお？」

アンおばあさんは、フォークとナイフを机の上において、ナプキンで口を押さえながらいました。

「うん、だいじょうぶだよ。だって夢の中でいつも会えるもん」

エイミーも、おばあさんと同じようにフォークとナイフを机の上において、いました。



「おや、まあ、気丈な子だよ、この子は」

「きじょうって？」

「元気だってことだよ」

アンおばあさんは本当にほっとしたようすです。

「・・・バア、ところでねえ・・・」

エイミーは、フォークとナイフを置いたまま、アンおばあさんにたずねました。

「ん？なんだい？」

「満月になると光る雑木林のことだけど・・・」

エイミーは、少しいいにくそうです。

「おや、まあ、なにかと思えば、そんなことを考えていたのかい？」

アンおばあさんが少し笑いながらいいました。アンおばあさんは、さっきエイミーが考えていたことが母親のことではなく、この雑木林のことだとわかりました。再びフォークとナイフを手に取り、安心したように笑って答えました。

「あそこは、満月になると不思議な光を放つのじゃよ。その光は薄緑色のような、青色のような、黄色のような、白色のような、それも光ったり消えたりと、林の一部だけがそうなるんじゃよ」

「知ってるよ。遠くから見たことあるもん」

「そうじゃな、一度栗拾いにいって道に迷って、あそこのそばを通ったことがあったね。あんたがまだ小さかったが、覚えておったかのう？」

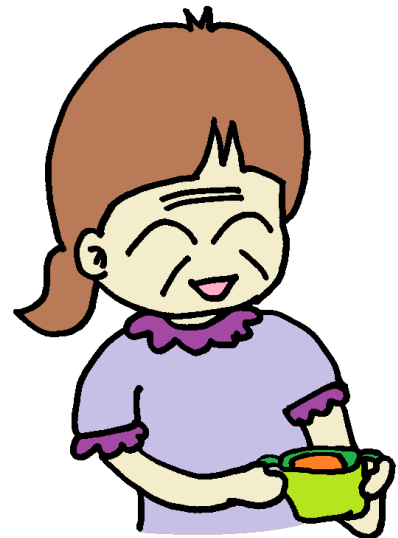
アンおばあさんは、またフォークとナイフを置いて話を続けました。エイミーも、身を乗り出して聞き入っています。

「・・・で、光る林は、だいたいそういうわけじゃよ・・・。これで少しは安心したかい？」

アンおばあさんは、しばらくこの不思議な雑木林の話をして、やっと目の前のパンをつかんで、小さくちぎって口に運びました。

「・・・でも、時計屋のおじさんが戻ってきてないって・・・？」

エイミーが心配そうにたずねました。



「あはははは、そのうわさかい？時計屋のおっかさんが、けんかして出て行ってしまったもんだから、追っかけていったのさ。何日も帰ってこなかったのさ、ぼつが悪くて街にでてこないのさ。あの光に飲み込まれたってことにしてるのさ。今は一緒に仲良くしてるよ。もうすぐお店も開くわさ」

アンおばあさんが、笑いながらいいました。

「なあんだ、そうだったの？」

エイミーも少し安心したようです。その夜、エイミーは、不思議な雑木林の夢を見ました。それはそれはとっても不思議な夢でした。

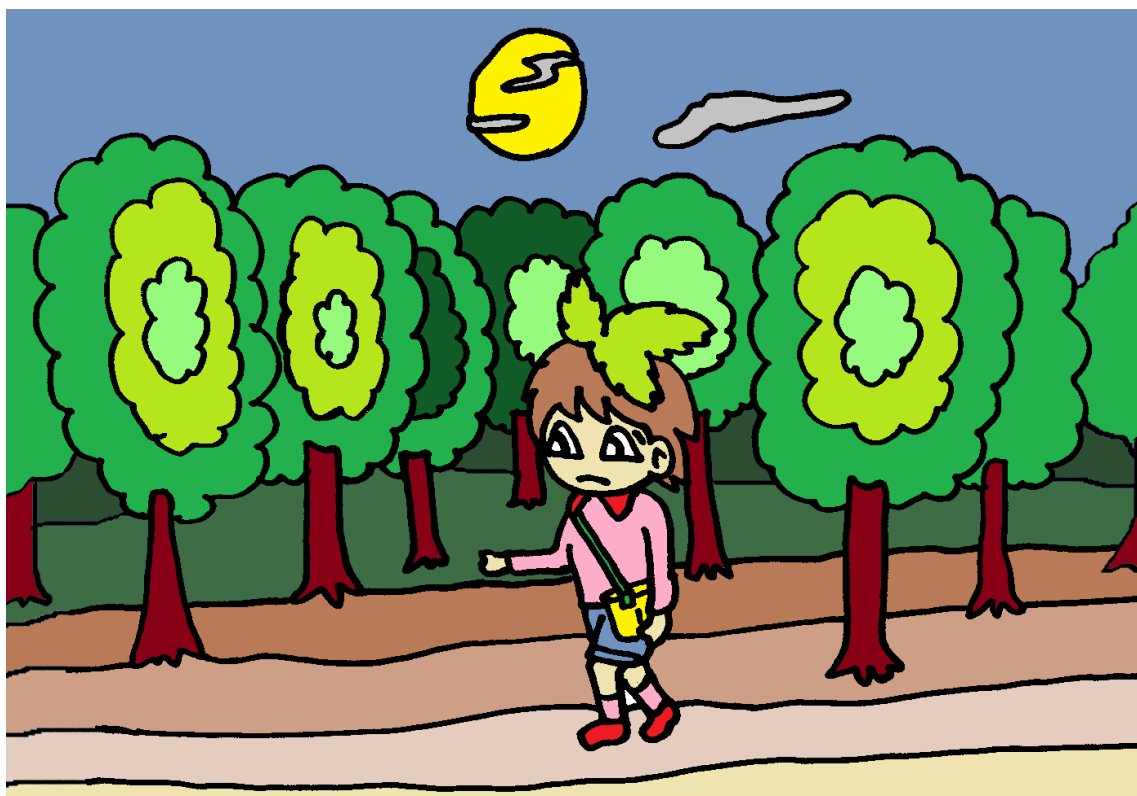


ふしぎな夢

エイミーは夢の中です。満月がこうこうと照らす、草原を歩いていました。大きな大きなお月さまです。

【お月さまが明るいから、夜こうして歩いていてもだいじょうぶね】

エイミーはいつものように歌を歌いながら、どこまでもどこまでもお月さまを追いかけて行きました。

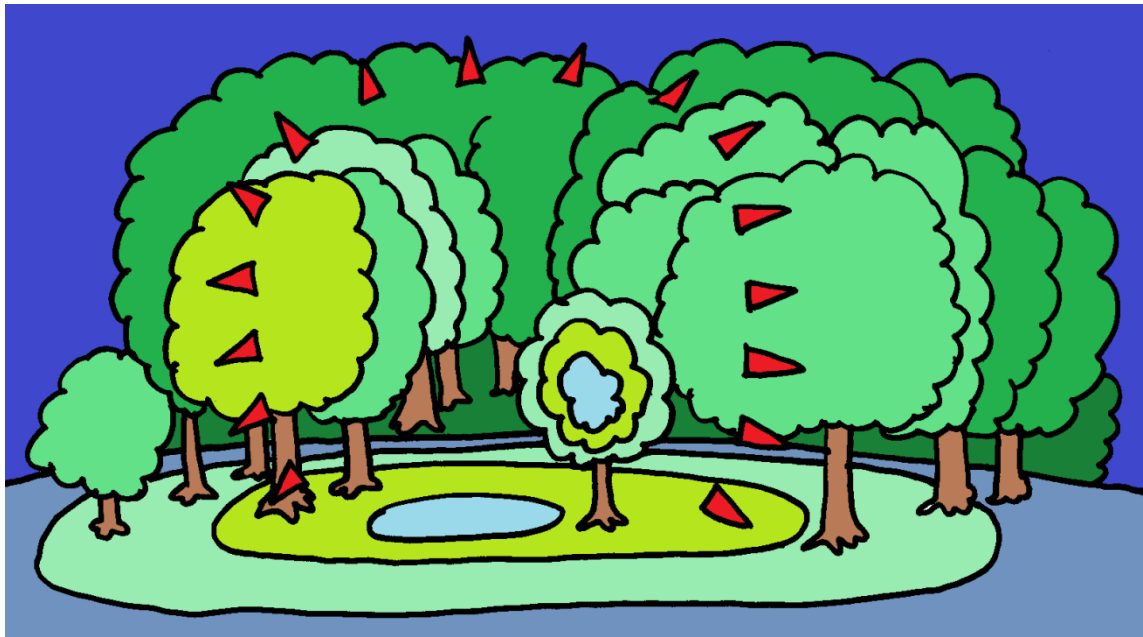


【あれーここはどこかな？光ってるぞ？あの雑木林かなあ？】

そうです。エイミーは食事の時アンおばあさんと話をした、雑木林の前に立っていました。

「きれい」

思わず声に出していいました。雑木林の一角でもう数本の木がボワーッと光ったり消えたりして、こっちへおいでといっているかのようです。



【もう少し近づいてもいいのかしら？】

エイミーは木の方へ近づいて行きました。よく見ると光っている木々の向こうに、まだ光っている木が見えました。奥の方までずっと続いているのです。

【この中はどうなっているのかしら。入ってもいいのかなあ？】

エイミーは1番外で光っている木の、すぐそばまでやってきました。手を差し伸べると木にさわることができます。中の方へ目を向けました。

【絵本でみたことがあるわ。まるでお城の舞踏会へ行く、きれいなシャンデリアの廊下みたい】

エイミーは、お姫様のような気分になりうれしそうです。

【入っていこうかしら？】

もうエイミーは、光っている木々の下にいます。よく見ると地面も白色や青色に光っています。手でさわることができる両側の木は、1メートル半くらいの間隔で立っています。その隣りの木も光っています。その外側の木も光っています。

エイミーは1歩また1歩と、中に入ってみました。月明かりで歩いてきた夜の目だったために、少しまぶしく感じましたがすぐに慣れました。よく見ると緑色や青色の光が、何かのリズムに合わせたように、光っては消えていきます。一定の間隔ではないのですが、音楽の好きなエイミーは、そのリズムに合わせて気持ち良さそうに呼吸をしています。

【どこまでつづいているのかしら？もう少し入ってみましょ】

そうやってエイミーは、もう少し奥の方へ入って行きました。距離にしてどうでしょう、30メートルくらいでしょうか。後ろを振り向くともう入口は見えません。

【どこまで入ってきたのかしら？】

エイミーは少し心配になりましたが、夢の中の出来事です。呼吸もゆったりと気分もとってもよく、奥へ奥へ入って行きました。歩いている地面はふんわりとじゅうたんのようになります。白っぽい青色に光っているそのじゅうたんは、どうやらコケのようです。自分のはいている靴や靴下も、真っ白に光っています。

【あら、光が少し動いているわ】

だんだんそのようすがわかってきました。緑色と青色の光が中の方へ中の方へいざなうように、ゆっくりと動いていることがわかりました。奥の方から、何かしら声が聞こえてきました。

「……」

【なにかしら？】

「……たす……」

【なんだろう？】

「……たすけ……」

【たすけて……？】

エイミーは、はっきりと「助けて」と聞こえました。ずいぶん、林の中の方まで来てしまいました。

「たすけてえ」

【やっぱり、たすけてってってる】

「コッカドウドウルドウ～～」

朝日と共に、一番鳥が鳴き始めました。カーテンから、陽の光がさしています。朝です。エイミーは、夢を見ていたことに気がつきました。はっとして、ベッドの下の置かれた自分のくつを見ました。

「あつ、くつが光ってる」

でもそれは、窓から差し込んだ朝日が、ちょうどいい具合に鏡に反射して、靴に付いている白い砂を、光らせていたようです。

Help

Help

【なあんだ、やっぱり夢なんだ。それにしてもなんかきれいで、すてきな夢だったな】

エイミーは、このことはバアにも友だちにも、秘密にしておこう、と思いました。

